

2018年8月12日(日)／説教者：神谷武宏

説教：「沖縄のあるべき姿～翁長知事の急逝を悼み～」

聖書：創世記26：15～25

先週8日、翁長雄志沖縄県知事が急逝(きゅうせい)した。余りにも早すぎる死である。辺野古新基地建設をめぐる中央政府との軋轢(あつれき)が、翁長知事の死を早めたことは間違いない。どんなに心労であったことか。とても悔しい。7月27日に「辺野古埋め立て承認の撤回」を表明したが、この撤回表明が最後の公の会見となった。その時、こんな言葉を残している。沖縄は「アジアのダイナミズムを取り入れ、アジアが沖縄を離さない。アジアの中の沖縄の役割、日本とアジアの架け橋、こういったところに“沖縄のあるべき姿”があるのではないか」と。共感する。琉球・沖縄という関係性の中で築きあげた絆をもって、アジア・日本の平和に貢献したいと言うことである。

2年前のうるま市20歳の女性が元海兵隊に殺害された事件を受け、翁長知事が安倍総理と菅官房長官に面会した時にこう発言している。「戦後の日本を見ていたらね、みんな凧(たこ)のように米国が操っているように見えますよ。『日本を取り戻す』とか『美しい日本』とか『戦後レジームからの脱却』とか、勇ましいこと言うけど、あなたも後ろから糸で引かれているんじゃないの」。翁長知事は、「日本国が独立しているのは神話であると言われなようにしてください」と面と向かってそのことを申し上げたと言う。誰に対しても物が言える立派な知事であったと思う。改めて、感謝と哀悼の意を表します。

今朝の聖書は、水をめぐる問題。すなわち命の問題がそこにある。イサクは三度井戸を奪われ、場所を変え、井戸を掘るということを繰り返す。何故そこまでして争いを避けるのか？この物語には平和を導くメッセージがあるように思う。この一連の出来事の中で井戸に名前が付く。「争い」、「敵意」。その背景には、「ねたみ」から来る「争い」、「憎しみ」から来る「敵意」ということになる。争い・戦争の背景には必ずその事があって起こることを表している。神は、「ねたみ」「争い」「憎しみ」「敵意」というものを避けよ、それ以上に「水」という命に繋がるものを追い求めよ。命に繋がることを追い求めることに、神は、希望を置き、平和を導くことを私たちに教えている。

翁長知事が最後に述べた「・・・アジアの中の沖縄の役割、日本とアジアの架け橋、こういったところに沖縄のあるべき姿があるのではないか」。この発言には、「ねたみ」「争い」「憎しみ」「敵意」というものはみじんもない。命に繋がるものを追い求めるというメッセージが込められている。聖書の物語と重なるように思う。神は、命に繋がることを追い求めるところに希望を置き、平和へ導くこと教えているが「沖縄のあるべき姿」はまさにここにあり。(神谷)